

本学所蔵エジプト考古学の稀覯書

佐々木 憲一*

明治大学図書館では、ナポレオン1世エジプト侵攻(1798-9)に参加したフランス人研究者達による『エジプト誌』*Description de l'Égypte*¹初版(1809-22)や、19世紀末・20世紀初頭イギリスのフランダース=ペトリー Flinders Petrie などが執筆した、ロンドン エジプト探検財団 Egypt Exploration Fund の報告書²など、エジプト学の歴史で画期となった調査研究報告をこれまで数多く収集してきており、近畿大学助教授高宮いづみ先生(当時明治大学文学部兼任講師)により、『図書の譜』前号に適切な紹介を頂いている³。

今年度は、ナポレオン『エジプト誌』と双璧を成す、19世紀エジプト学創成期における最高峰の報告書であり、エジプト学の基盤としての役割を現代でも担っている、レプシウス Carl Richard Lepsius (1811-1884) 著『エジプト・エチオピア記念碑』*Denkmäler aus Ägypten und Äthiopien*⁴初版を蔵書に加えることができた。『エジプト誌』は時々古書市場に出回るが、レプシウスはなかなかオークションにも出ないもので、さらにこの2書を両

*ささき・けんいち／明治大学文学部助教授／考古学

¹明治大学図書館所蔵資料の請求記号・092.3/241//H

²The Egypt Exploration Fund. Memoir. 明治大学図書館所蔵資料の請求記号・099/719～720//D, 099/797//D, 099/799//D, 099/3990～3994//D, 099/4372～4380//D, 099/4393～4394//D

³図書の譜第9号(2005年3月)p. 220-225

⁴明治大学図書館所蔵資料の請求記号・099/3874//D

方所蔵している国内の図書館は、早稲田大学、天理大学図書館のほかは知られていない。本稿ではレプシウスを中心に、『エジプト誌』も含めた紹介を試みる。

レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』は本篇(1849-1859)、趣意書 Prospectus(1849)、図版補遺 Supplementary Plates(1897-1900)、本文篇 Text(1897-1904)からなる。図版補遺と本文篇は、著者の死後、弟子のスイス人エジプト学者エドワール＝ナヴィーユ H. Édouard Naville により完成された。本書の本文篇を早くから本学図書館は所蔵していたが、図書館特別資料として本篇 12 巻の内、第 2 部、第 3 部を構成する 6 巻と、文学部研究用基礎資料として趣意書、図版補遺が 2005 年度新たに図書館に入った。本学図書館のエジプト学コレクションに資するところは極めて大きい。

著者レプシウスはエジプト学創始者の一人で、ベルリン大学教授、ベルリンエジプト博物館長、ベルリン図書館長を務めた人である。1810 年ドイツ Naumburg に生まれ、ライプチヒ、ゲッティンゲン、ベルリンの各大学で、比較言語学などを修め、1833 年に古典考古学で博士号を授与された。その後パリへ赴き、研究を深めた。丁度、ジャン＝フランソワ＝シャンポリオン Jean François Champollion (1790-1832) がエジプトの絵文字解読に成功し、その成果を刊行したところであった。レプシウスはシャンポリオンの研究成果を積極的に支持し、レプシウス自らは絵文字の音節記号やコプト語との類似性を認識、学界での古エジプト語の理解をさらに深めることに大きな貢献をした。さらにヨーロッパ各地で収集されていたエジプトの考古・美術資料を実際に調べて回った。

その頃ドイツの探検家フンボルト Alexander von Humboldt はプロシア国王フリードリヒ＝ヴィルヘルム 4 世に、ナポレオン 1 世の調査の欠を補うためのエジプト遠征を提言、1841 年、弱冠 31 歳のレプシウスがその遠征の総指揮を命じられる。レプシウスは 32 歳でベルリン大学講師に就任、翌年 1842 年、多数の研究者と優秀な画家を伴いエジプトに出発する。当初から 1845 年までの 3 年計画であったため、それ以前のエジプト遠征では考えられぬくらい綿密な学術調査を、ナイル渓谷からスーダンを対象に行っている。その際メンフィスだけに 6 ヶ月、テーベに 7 ヶ月を費やした。

レプシウス遠征の最大の成果は、初期王朝時代・古王国時代(第1-8王朝、3100-2270 B.C. 頃)の巨大建造物を多数発見したことである。紀元前4千年紀まで遡って遺跡を徹底調査した功績は計り知れない。特に、30基のピラミッドを新たに発見し、マスタバ130基を調査した。マスタバとは、初期王朝時代に王や貴族の墓として、古王国時代には貴族墓としてのみ建造された建物である。石棺を納める地下の玄室と貯蔵庫の上に、煉瓦や石を積み上げた建物が載る構造をとる。地上の建物内部には偽扉と祭壇を備えた礼拝室があり、壁面には日常生活の様子などが描かれた。

レプシウスは王家の谷で計測をした最初の研究者であり、寺院の壁面の文字やレリーフの型取りを行った。またカルトウーシュ cartouche という、王名が記されている部分も徹底的に記録した。最終的に、完全な墓室、巨大な彫像、大型の浮彫、パピルス、レリーフの型取り、図、図面プラン、地図、計15,000以上をプロシアに持ち帰ることを、当時のエジプト総督ムハンマド＝アリーから許された。

この遠征のおかげで、1850年設立の王立博物館エジプト部門はエジプト学をリードする研究機関に成長した。1855年、建築家アウグスト＝シュテラーの設計により新博物館が国立ベルリン博物館群の立地する博物館島に開設。これらの収集品を展示するため、レプシウスの構想に従って、新博物館内に豪華な内装を施した展示室をシュテラーはデザインする。

1865年、レプシウスはエジプト博物館長に就任。翌年またエジプトを訪れ、ナイル河口地域三角州の東部とスエズ地帯の巨大建造物を調査した。このとき、第21王朝(1069-945 B.C. 頃)時代的首都であるタニス Tanis を発見した。この調査では、「カノープス Canopus の定め」と後に呼ばれる、古エジプト語、ギリシャ語を含む3ヶ国語の碑文を発見、ロゼッタ・ストーンに基づくシャンポリオンの解釈が正しいことが立証されることとなった。

上記の1842-5年、4年間の学術調査の成果がこの報告である。皇帝ヴィルヘルム4世に、「他のいかなる類似書よりもすぐれた形態と美をもつ」ことを要求されたこの報告の本篇はフォリオ版大冊(76.5 × 61.0cm)12冊で構成され、最大冊の第5巻は重量約15キロ。全体が図版894葉からなり、数多くの彩色版を含む。その大きさだけでなく、紙の厚さ、三方金(天、

地、小口を金にすること、full gilt edges; ちなみにナポレオン『エジプト誌』は天、地、小口とも紙の白のままである)の装飾など、明らかに『エジプト誌』を強く意識した、プロシア国家の威信をかけて製作された本といえる。その構成は次の通りである。

第1部(1, 2巻) トポグラフィーと建築(地図、絵図、設計図、地取図など)

第2部(3, 4巻) 古王国(中王国時代も含む; 2613-1750 B.C. 頃)の記念物

第3部(5-8巻) 新王国(1550-1086 B.C. 頃)の記念物

第4部(9巻) ギリシア、ローマ時代の記念物

第5部(10巻) エチオピア記念物(第25王朝系のピラミッド・寺院の刻文)

第6部(11, 12巻) ヒエログリフを除く刻文集

このうち、本学図書館に今年度入ったのは第2, 3部の計6巻である。第2部第3巻では、主として第4, 5王朝(2613-1234 B.C. 頃)に属する、ギゼー、サカラなどのピラミッド壁面の浮彫が図示されている。第4巻では主として第4, 5, 6, 12, 13王朝(第6王朝は2345-2181 B.C. 頃、12, 13王朝は1985-1650 B.C. 頃)に属する、ギゼー、サカラ、メツツイン、ベニハッサン、テーベなどのピラミッド壁面の浮彫、巖石文などを集める。第3部第5, 6巻では、第17~19王朝(1650-1186 B.C. 頃)系の、テーベ、エル・カブ、カルナック、セムネン、アマルナなどの寺院、そのほかの壁面浮彫を、7, 8巻では、第23, 24, 26, 27, 28王朝を除く、第19~30王朝系のテーベなどの寺院を図示している。

後述するナポレオン『エジプト誌』との大きな違いは、この構成である。『エジプト誌』編纂のときは、エジプトの絵文字は解読されていなかったため、古代篇の構成も地域別、羅列的である。しかしレプシウスがこの報告書を作成する頃には絵文字の解読が可能な時期で、レリーフその他資料をすべて年代順に配列した。おかげで、『神、墓、学者』の著者ツェーラムは、レプシウスがエジプトで見たものの秩序を見いだし、エジプト史をパノラマとして捉えることのできた最初の学者である、と評価している。

レブシウスの報告の特色として、全 12 巻をことごとくレリーフと見取り図などに集中していることがあげられる。そして、結論めいた文章はない。これはすなわち、この時代順配列こそが大きな貢献といえるのではなからうか。レリーフなどは、石の色を忠実に写したものであろう、黄色系の色刷りが大半である。少数であるが、極彩色の壁画などは、フルカラー図版である。とはいえ、『エジプト誌』とは異なり、陰をつけず、立体的な表現は採用されていない。同じ資料を扱ってはいるが、表現方法など両者の違いは多い。

さて、比較の対象となっているナポレオン『エジプト誌』は、正確には『エジプト誌:フランス軍の遠征中にエジプトで行った観察と研究の集成』*Description de l'Égypte, ou Recueil des Observation et des Recherches qui ont été faites en Égypte pendant l'expédition de l'Armée Française* といい、本学が 1995 年度に購入したのは初版本 (1809-22) である。

この大部な報告書は、ナポレオンによる 1798 年のエジプト侵攻と同時に実施された、考古学・美術史、博物学、民族学に関する調査の成果をまとめたものである。侵攻に際しナポレオンはフランス学士院の協力を得、約 200 人の学者、技術者、画家、製図家らを引率した。そして戦争の傍らナイル川中・下流域の巨大遺跡は勿論、動植物、民俗の調査を行った。調査では、後に絵文字解読の鍵となるロゼッタ・ストーンを含む多くの資料を収集したが、帰途、ネルソン提督率いるイギリス海軍に大敗、収集品はすべてイギリスへ引き渡される。フランスが発見したロゼッタ・ストーンが大英博物館で展示されている所以である。しかし、調査の際作成していた膨大な資料をもとに、当時のフランス最高の学問水準と技術の粋を尽くして完成した、ナポレオン勅命の書が本報告書である。

本報告書は、古代篇 *Antiquités*、現代篇 *État Moderne*、自然史 (博物) 篇 *Histoire Naturelle* の 3 部門構成で、各部門が複数冊の本文と図版から成る。初版はパリの帝室印刷所で印刷され、1814 年のナポレオン失脚後も、ルイ 18 世の王党政府により事業は継続された。したがって、本の扉の「ナポレオン皇帝の命により帝室印刷所で印刷」のフレーズが、「政府により王室印刷所で印刷」に 1814 年以降替わっている。そして 1822 年にやっと完成した。本学所蔵の報告書の構成と出版年は次の通りである。

本文: フォリオ判 (25.4 × 40.7cm) 9 冊

古代篇 解説 (Descriptions) I(1809), II(1818)

古代篇 覚書 (Mémoires) I(1809), II(1818)

現代篇 I(1809), II/1(1812), II/2(1822)

博物篇 I(1809), II(1812)

図版: グランド・アトラス判 (53.4 × 70.2 cm) 11 冊

古代篇 I(1809), II(1812), III(1812), IV(1817), V(1822):

エレファント判に含まれるものを入れて 419 図

現代篇 I(1809), II(1817): エレファント判に含まれるもの
を入れて 170 図

博物篇 I(1809), II/1(1817), II/2(1818?): 224 図

序文篇 (1822?)

エレファント判 (70.2 × 106.8cm) 3 冊

古代篇 VI: 古代篇 IV, V および現代篇 II の大型図版を含む

古代篇 VII: 古代篇 I, II, III および現代篇 I、古代篇本文
覚書に付加されるべき大型図版を含む

地図篇 (1818?): エジプト地形図 47、エジプト地図 3、そ
の他本文に付加されるべき地形図を含め、合計 52 図

これら図版の大半は単色の銅板印刷であるが、手彩色のカラー図版 44 面が含まれる。

天理大学富永牧太氏の調査に拠れば、初版本には製本の経緯によりセットの冊数が異なるものが知られている。天理大学は初版本のうち、本学蔵書と同様のエレファント判を伴うセットとそうでないセットを2種類所蔵している。大英博物館蔵書もエレファント判を伴わないセットである。これは、普通製本として図版 12 冊が基本的にあって、図版中より超大型図版のみを抜き出して2冊にまとめたものらしい。また地図篇も、本学蔵のようにエレファント判のものと、グランド・アトラス判のものがあるらしい。その刊行年も 1828 年説がある。

なおこの『エジプト誌』は、第2版が1821年から30年にかけて刊行

される。第2版は、「ナポレオン皇帝の命により云々」の記述が扉になく、出版はパンクック印刷所であること、彩色図版がないこと、などの差異がある。本学は所蔵していない。

以上、レプシウス『エジプト・エチオピア記念碑』を中心に、ナポレオン『エジプト誌』も含めた紹介を行った。文学部では毎年兼任講師の先生を招聘し、「エジプトの考古学」を開講しており、250人教室を準備せねばならないような人気講座である。今回のレプシウス購入は、図書館への貢献はもちろん、大学の教育活動にも大きく資するものである。ちなみに2006年2月1日から3月27日まで大学博物館特別展示室を借りて、これら2書の特別展示会を開催したことを付記する。

本稿の作成にあたっては、雄松堂書店 柚木正徳氏にナポレオン『エジプト誌』関係の参考文献渉猟などで多大なお世話になった。記して感謝したい。

参考文献

- 朝日新聞社 (編) 1999『大英博物館 古代エジプト展』朝日新聞社
- ツェーラム, C. W. (村田数之亮訳) 1982『神、墓、学者』(増補新版) 中央公論社
- 東京国立博物館・朝日新聞社 (編) 2005『世界遺産・博物館島 ベルリンの至宝展』朝日新聞社
- 富永牧太 1955「レプシウス“埃及・エチオピア古蹟図譜”について」『ビブリア』3号, pp. 12-15
- 〃 1969「ナポレオン皇帝版『エジプト調査書』の書誌について」『ビブリア』42号, pp. 37-44
- ブライア、ボブ及びピーター＝ドーマン (共同解説) 1988『古代エジプトの栄光—ナポレオン「エジプト誌」図録聚英』雄松堂出版
- Murray, Tim (編) 2001 *Encyclopedia of Archaeology — History and Discoveries*. ABC-CLIO, Santa Barbara